

おわりに

人間の体は、そしておそらく心も、長い生命進化の過程で自然選択によって形づくられたものである。現在のわれわれには想像もできないような厳しい環境の変化に適応して生き残り、子孫をつくった祖先の形質が選択されてきて今日の人間が生まれたわけである。そこにはさまざまなトレードオフがあり、それらは少し環境が変わるとかえって不利になることも少なくない。common diseaseの多くは、そうしたトレードオフの結果であると考えることができる。とくにヒトは長い生命進化の歴史からみれば瞬間ともいえないほどの短い期間に、環境を大きく変えてしまった。爆発的な糖尿病の増加、そして憂慮されている精神疾患の漸増も、その結果であるといえるであろう。

進化の基盤をなすものは、遺伝子の変異に基づく個体差である。種としてみれば、個体差が大きいほうが環境の変化によりよく適応できる。ヒトのゲノムにみられる顕著な個体差も、人類が短い期間に進化できた理由であるのかもしれない。しかしそれはまた、先天性疾患が多いことにもつながっている。進化と病気はトレードオフの関係にあるとあってよいであろう。

進化医学は新しい学問分野であり、まだあまり注目されていない。しかし、病気の成因を深く理解し対策につなぐために、進化医学の視点は不可欠である。別の言葉でいえば、それは病気に潜む進化の分子記憶を探ることである。本書をきっかけとして、多くの人が壮大な生命進化とそれに伴う病気の歴史に、より強い関心をもっていただきたい。

井村裕夫